

第3 両親の家系

家系については、父方の祖父は第一回の国会議員たりしも、国会には最初からずで伊藤博文の率いる政党ありしも、生真面目の性としてそれに屈せず、かくして第二回には国会を避けて、当時まだ政党色のなかった県会に転じて、議長4期16年を勤め、没後巨大なる彰徳碑が建てられた。

母方の家系は戦後の農地解放までは24代続いた代々の地主。その手堅さと利口筋ということで、近隣の村にも聞こえていた。

第4 個人としての両親

これが大問題にて、予の父親は、祖父が政治家として他出が多く、その上祖父は幼児（5才）からの貰われ子として、養家の親戚の娘と結婚。よって必ずしも相ふさわしからず。したがって予の父親は祖父にや祖母に似て生来極度のお人好しの上に……予多分にその遺伝を受けたり……全く苦勞知らずにて、倭人の言に操られ、十年にして家産を失うに至る。

母親はこれとは正反対にて、女3人の姉妹中の末っ子なれども、東洋的合理主義者とも言うべく、常に大局を見つつ、しかも着実なり。

第5 破局

その結果が破局に陥りしは、不可避の必然とも言うべく、善悪など言うべくもなし。かくして男の子3人を生みしも……内ち1人は幼時死亡。……やがて里に戻って、仲人初め度々人をやりしも、ついに帰らず離縁となり、その運命はここに最初の巨大なる衝撃を受けるに至れり。

されどこれに対して、予はかつていちども母を恨みし事なし。何となれば、両極端の夫（予の実父）といつまでも一緒にいるのは、いわば水泳を知らぬ人間にまといつかれたようにて、破局は「共心中」のほかなきことにて、母親は本能的に感じた故であろう。

それゆえ予は、かつていちども母を恨みしことなれども、同時にまた、いちども懐かしいと思ったこともない。何となれば、2人は一緒にいたこともなければ、また、そもそも女性として予の求めしタイプとはおおよそ正反対であった故である。

